

改訂

日本文化

ス  
名  
等

日本文化の問題

✓  
一行

ワ  
タ  
ト  
ヤ

一

三  
行

以下元と同一に

私が今<sup>此題目によつて</sup>日本文化の問題と述へようとする所は、歴史的  
 事実によつて我國文化を研究し、それによつて我國文化の  
 特殊性を明しせうと云ふのではない。<sup>さういふ</sup>研究の重要な  
 ことは云ふまでもない。私は~~その~~研究を尊重するに於  
 て人後を落つるものではない。併し其研究は隠す所なく  
 蔽ふ所なく、美を美と醜を醜として、何処までも公明正大  
 をなせばならない。而して其~~研究~~それによつて深く世界

×それは自ら他とその人があつてあつて

世  
用  
用



×(「直毘靈」)

朝日と白山山櫻花と云ふ如く。

歴史の根柢と觸れ底のものでなければならぬ。由来我々まはぐくみ来つた日本精神とは、かゝる公明正大なものがあ  
 ると思ふ。学問的精神とは、かゝる公明正大の精神と基くも  
 のでなければならぬ。東洋は教であり、西洋は学である。と  
 語は最も能く支那文化に當嵌るのではなから  
 うか。神ながら言擧せぬ國と云ふのは、議論の爲に議論せな  
 い。概念の爲に概念を弄せないと云ふことであつて、宣長が  
 其はた、物にゆく道と云ふ如く、直に物の眞実と  
 ゆくと云ふ意を解すべしと云ふが、  
 行くこととは、主観的感情と云ふことでは

唯因襲的の、  
單に傳統を継ぐとか、

のまゝに振舞ふとか



本（た）々々事象せぬとは考へない事象（た）なり。云ふこと（た）があらざれば本々  
 我何処までも物の眞実を行くと云ふことは科学的精神と  
 云ふもの（た）もなげ水はなさない。己を空くして物の眞実と従  
 ふこと（た）でなければなさない。言響せぬとは我見を張らない  
 と云ふこと（た）でなければなさない。眞実の前頭を下げる（た）こと  
 非ふこと（た）でなければなさない。それは唯考へないとか妥協  
 するとか云ふこと（た）であつてはなさない。物の眞実と徹する  
 非ははこと（た）は、何処までも己を尽すこと（た）でなければな  
 ない。私は思ふ、東洋の世観、人世観の底は、西洋のそれと  
 比して勝つもの（た）があらざないもの（た）があらつた。然るに其の何処までも

支那文化も印度文化も、東洋と偉大な存在はあつた。  
 （その根柢と於て）  
 なものか



西の文化

日本文化 4

も眞実に行くといい。精神の乏しかつたため、それは硬化し  
 固定した。独<sup>我國民が</sup>東洋に於て此等の文化の影響を受けながら  
 も、西洋文化を<sup>理解</sup>消化し<sup>華</sup>洋<sup>の</sup>深<sup>の</sup>刺<sup>の</sup>り<sup>の</sup>創<sup>の</sup>造<sup>の</sup>的<sup>の</sup>精<sup>の</sup>神<sup>の</sup>を<sup>の</sup>富<sup>の</sup>  
 かに<sup>は</sup>豊<sup>に</sup>在<sup>る</sup>の<sup>の</sup>此<sup>の</sup>職<sup>の</sup>と<sup>して</sup>右<sup>の</sup>如<sup>き</sup>日<sup>本</sup>精<sup>神</sup>子<sup>由</sup>こ<sup>の</sup>  
 ではなからうか。私は教を軽んずると云いのはない。学  
 は眞<sup>の</sup>人<sup>の</sup>道<sup>を</sup>兼<sup>て</sup>教<sup>へ</sup>る<sup>もの</sup>でなければならぬ。それを  
 離れて学と云いものはない。ソクラテスに始まつたギリシ  
 ヤ哲学も<sup>さう云いもの</sup>兼<sup>て</sup>教<sup>へ</sup>る<sup>もの</sup>であつた。人<sup>の</sup>文<sup>の</sup>の<sup>進</sup>歩<sup>を</sup>伴<sup>つ</sup>て<sup>い</sup>  
 化<sup>の</sup>發<sup>展</sup>する<sup>であ</sup>らう。併し何処までも人<sup>の</sup>と云いものが<sup>の</sup>  
 なければならぬ。唯、学は何処までも廣義に於て人の学

X 東洋文化の新たな創造者とも思はれるのは、

西田



か

日本文化 5

X人間も身体的には自然科学的である。併し

であると共に、教は眞実の教でなければならぬ。物の眞実  
 の基いた教でなければならぬ。然るがれば、それは單なる  
 独断であり、因襲であり、虚偽である。教は生々發展の教でな  
 なければならぬ。生命の教でなければならぬ。学と云へ  
 ば、人はすぐと唯自然科学の如きもの主考へる。併し人は人間を  
 自然科学的に考へようとするのではない。自然には自然の  
 眞実があり、人間には人間の眞実がある。人間の眞実は社會  
 的歴史の眞実でなければならぬ。併し<sup>（新く云ふも）</sup>實在は二種あるの  
 ではない。實在は唯一の歴史の實在あるのみである。自然科  
 学的實在も此に入るのである。これが私の科学觀である

である

小文字 荻原謙次集第三の「経験科学」参照。

日本文化の如何なるものかを明くするは、我々は我國の歴史（主観）と制度文物について研究するの外はない。（始）

と云つた如く、私はかゝる研究を尊重すると共に、今日日本文化が世界文化として考へられ、世界文化として発展するとは、それが如何なる意味に於て、又如何にしてと云ふことが問題とならなければならぬ（考へられねばならない。即ち）。而してそれは東洋文化（又）と西洋とが一つの世界となつた今日、東洋文化が如何なる意味に於て世界文化として、将来の世界歴史に貢献するかと云ふことである。唯、（外國語を）知らないものは

荻原謙次集第三の「経験科学」参照。



X 然らざれば夜郎白犬の語を免れぬ。

自國語<sup>よつて</sup>何れも知りな<sup>い</sup>もの<sup>であ</sup>りといふは水<sup>の</sup>如く物<sup>は</sup>他<sup>と</sup>比較  
 する<sup>こと</sup>によつて眞<sup>に</sup>その物<sup>を</sup>知り得<sup>る</sup>のである。我々は  
 自己<sup>を</sup>客觀<sup>の</sup>鏡<sup>に</sup>映<sup>す</sup>ことによつて自己<sup>を</sup>知り客觀<sup>的</sup>  
 自己<sup>を</sup>知<sup>る</sup>ことによつて客觀<sup>的</sup>の働<sup>き</sup>得<sup>る</sup>のである。  
 おれは夜郎<sup>の</sup>白犬<sup>の</sup>語<sup>を</sup>免<sup>れ</sup>ぬ。單<sup>に</sup>特殊<sup>性</sup>を明<sup>す</sup>  
 する<sup>事</sup>と云<sup>い</sup>ただけ<sup>で</sup>は足<sup>り</sup>ない。世界<sup>の</sup>日本<sup>と</sup>して立<sup>た</sup>ん  
 出す<sup>事</sup>今日<sup>の</sup>日本<sup>に</sup>於<sup>て</sup>は特<sup>に</sup>然<sup>る</sup>特殊<sup>性</sup>を明<sup>す</sup>水<sup>な</sup>ければな<sup>ら</sup>  
 ない。物<sup>と</sup>物<sup>と</sup>を比較<sup>し</sup>て物<sup>の</sup>特殊<sup>性</sup>を明<sup>す</sup>とは如  
 何<sup>れ</sup>も<sup>も</sup>こと<sup>で</sup>ある<sup>か</sup>。我<sup>々</sup>は普通<sup>の</sup>物<sup>と</sup>物<sup>と</sup>を並<sup>べ</sup>て其<sup>の</sup>異  
 同<sup>を</sup>明<sup>す</sup>する<sup>の</sup>が所謂<sup>の</sup>分類<sup>法</sup>である。併<sup>し</sup>か、了<sup>了</sup>外<sup>面</sup>的<sup>な</sup>方法<sup>を</sup>

西田川紙

は、往々鯨は魚であると云ふ如き誤り陥り易い。尚一つは物の構造から區別する例へば同一の種の生物は内外面的に非常な異なつたものでありあつたあつても、その根本的構造に於て同一である。鯨の頸骨は非常に短く附着し始<sup>は</sup>め<sup>は</sup>肩<sup>は</sup>にシラップの頸は非常に長いが、共に哺乳動物として頭骨が七つであり、唯前者に於てはそれ等が附着して一つの様になつて居るに過ぎないと云はれる。かゝる見方が物を區別し比較し區別し行くことが出来る。生物の形態学といふ如きものはかゝる立場に立つものである。併し生物の形態と云ふものは機能と離れて考へることは出来ない。

原稿

四三三三

そのもの



×論理的に云へば、

日本花

9

ない。かゝる問題は機能の問題に進んで行かなければなら  
ない。生理学と形態学とは結合せなければならぬ。而して  
機能の問題は更に生物発展の問題に進んで行かなく  
ればならぬ。物と他と區別し物の特殊性を明瞭に物  
を知るときは、一般者と云ふものがなければならぬ。物の長  
大小長短を比較する尺度がなければならぬ。單なる令類  
法に於ては、それは所謂一般概念と云ふものであろう。構造  
と云ふ物もその於ては、それは構成的原理といふ物も  
のでなければならぬ。我々はそれを具体的な一般者と云ふ  
のである。



従来我國に於て東西西洋の文化の比較と云ふのは、  
 西洋文化と東洋文化とを並べて、<sup>外</sup>面的に特徴を比  
 較すると云ふのが多いのでな<sup>か</sup>つた<sup>か</sup>うか。西洋はかうい  
 小説があるが東洋もかうい小説がある<sup>か</sup>。或は東洋はか  
 うい<sup>事</sup>があるが西洋はかうい<sup>事</sup>がないと云ふの類  
 である。ホモサピエンスとして同じ人間の考へる所、<sup>同</sup>じ  
<sup>人物の</sup>物<sup>の</sup>あつのは云ふまでもない。<sup>併し</sup>純<sup>な</sup>る<sup>の</sup>哲學的<sup>學</sup>說  
 の如きものであつても、<sup>背景</sup>其の歴史的地盤<sup>を</sup>離れたものでは  
 ない。之を把握し之を論ずるのは、その歴史的地盤からでな  
 ければならない。それを生きたものとして把握せしむるは

西田川



水はなすな。イズムと云ふ如き抽象概念によつて比較す  
 る如きは、膚淺たるを免れな。例へば賢者大師の事々無礙  
 とヘーゲルの辯證法と云ふ如きものが、一見相類するが如  
 く考へらるるも、一フは佛教的、一フはキリスト教的として、  
 その精神<sup>ハテ</sup>は<sup>テ</sup>大に<sup>ニ</sup>異なるものでなければなら  
 ない。又此方ははかういふものが彼方ははないと云ふても、  
 頸の長きものもあるが短いものもあると云ふ如く、一<sup>ハ</sup>方<sup>カ</sup>長  
 なるもの<sup>ハ</sup>は<sup>ナ</sup>短<sup>ク</sup>と云ふ如きことでなければなら  
 ない。單<sup>タ</sup>に<sup>シ</sup>兩者の記載<sup>ヲ</sup>止<sup>メ</sup>る<sup>ハ</sup>、尚<sup>モ</sup>それ<sup>も</sup>よい<sup>かも</sup>  
 知れな<sup>い</sup>が、兩者の善悪優劣を論ずる<sup>ハ</sup>、我々は更<sup>ニ</sup>



我々の歴史的生命的本質を返つて考へて見なければな  
 らない。<sup>是故に種は</sup>我々の歴史的生命的本質と云ふものが問題  
 とならなければならぬ。<sup>なれと思ふ。</sup>或一つの文化を取つて、それが即  
 文化とは云はれない。若し<sup>新進的の考へ</sup>生物学的語を以てすれば、<sup>自</sup>文化は  
 化原形<sup>態</sup>と云ふのは如何なるものであろうか。歴史的生命的は、  
 種々なる生物的生命的の如く、種々なる環境に於て、種々なる  
 形を取ると云ふことが出来るであらう。併し<sup>高等</sup>哺乳動物  
 の例子について云つた如く、<sup>人間の文化</sup>種々なる文化は、<sup>原形</sup>原形  
 と云ふ如きものがあるであらう。種々なる文化は、<sup>原形</sup>原形は  
 亦もかゝる原形に於て、理解せらるる比較せらるる原形はなす左

X 生物の形態を考察するに於いてゲーテの語をかりて云へば、  
 ⑨

西田三太郎



一、原形と云つても、~~唯~~固定せる形態の如きものを云ふので  
 はなく、無限自己自身を形成するもの、形成作用的なるものを云ふの  
 である。そこから種々なる形成の方向と、その発展性が~~は~~  
 とが考へられるのである。東西文化の對立及びその相互関  
 係も、かゝる立場から把握せられなければならぬ。私は  
 何処今日我々はまでも理論的研究を要する、即ち學を要すると云ふ  
 所以である。知性的であり、理論的であり、何処までも物の眞  
 實に行くとし、ギリシヤ文化の源を發した歐洲文化は、そ  
 の背後に雄大な理論を有つて居る。而してそれによつて  
 種々なる文化を批判し、その發展の方向を論ずるのである。

西川



日本文化

幾千年未種々なる文化の相剋摩擦の結果、一つの理論的  
 原型が構成せられたのである。而して彼等はそれらを唯一の  
 の文化原型と考へて居る。それによつて文化形態の段階を  
 考へ、東洋文化を未発展の段階に於てあるものと考へて居  
 る。東洋文化も発展すれば、彼等の文化と同じものとならざ  
 るべからざるものと考へて居る。ヘーゲルの如き偉大な  
 思想家も然考へてゐたのである。私は此の問題があると思  
 ふのである。

ランケの如く、ローマ以前の文化はすべてローマといふ  
 湖へ流入入り、ローマ以後の文化はすべてローマといふ湖

西田三木



から流水出た。ローマ以来欧洲諸國は一つの世界であつた  
 と云ふことができた。各國それそれの<sup>極自</sup>特有の文化を有する  
 は云ふまでもないが、それ等は一つの文化の種々なる<sup>方面</sup>發展  
 と~~考へ~~<sup>考へ</sup>るべきであらう。東洋は一なりと云ふも、未だ欧洲  
 諸國が一つの世界であると云ふ<sup>云ふ</sup>如き意味に於て一つの  
~~世界~~<sup>云は</sup>とは<sup>云は</sup>存<sup>存</sup>在<sup>在</sup>しないと思ふ。云ふまでもなく、東洋文化は  
 は東洋文化の共通性一貫した特色がある。併しそれは尚  
 共通性<sup>概念的</sup>概念的であつて体系的<sup>概念的</sup>体系的統一とはなつてお  
 ないのではなからうか。東洋が眞の統一となるのは、之からと  
 考へられるのである。我々は東洋文化の<sup>後、</sup>背景<sup>後、</sup>理論的<sup>後、</sup>体系的

田川







東洋諸國がそれ單それの特殊性を安んじて居ることができない。日米を代表する世界が一つ世界世界となつたのである。昔、ローマが武力によつて歐洲を一つの世界とした。今は英國の自由貿易が世界を一つの世界とした。而してその背後に近代科学の發展と云ふものがあるのである。今日の何れの國も軍事的に自身として立てない。現在の歐洲がそれ主事実上を證明して居るのである。出水は王では世界は諸々の國々は世界に於て横に並んでゐた。世界は空間的世界であつた。今は世界は縦の世界となつた。時間的となつた。今日世界は井井の抽象的と云ふものは現実を目を敵ふものと云

△従来は世界と云へば抽象的と考へられた、併し今日は世界が具體的なのである。

四三三三

今日は何れの國も軍事的に自身として立てない。現在の歐洲がそれ主事実上を證明して居るのである。出水は王では世界は諸々の國々は世界に於て横に並んでゐた。世界は空間的世界であつた。今は世界は縦の世界となつた。時間的となつた。今日世界は井井の抽象的と云ふものは現実を目を敵ふものと云



はざりを得ない。今日世界が具体的なものである。今日世  
 界の各國がコスモポリタンのな世界主義を反して~~後~~民主  
 義を還さなければならぬのは、世界と云ふものが抽象  
 的なるが故ではなくして、世界が具体的となつた故でなけ  
 ればならぬ。横の世界が縦の世界となつた故でなければ  
 ならない。亦、~~世界~~世界は~~抽象的~~抽象的媒介を過ぎな  
 かつた。今日は世界は我々の具体的生命の媒介であつたの  
 である。我々は具体的世界<sup>の一角</sup>の一面として自己や自身を維持せ  
 なければならぬ。それが特殊が一般となると云ふこと  
 である。特殊はそのまゝ、~~直に一般と考へ~~直に一般となつること



はできない。

幾千年来我々<sup>（心）</sup>まほしくみまつた東洋文化の底論

理と云ふものが無いであらうか。我々の人生觀世界觀<sup>（は）</sup>有

カ論理的構造は如何なるものであろうか。それ水自身に獨特

な物の見方考へ方。それ水自身の論理を有たないであらうか。

それ水は多くの人の考へる如く單に情と云ふ如きものであ

らうか。私も日本文化が情の文化であると云ふ如きこと<sup>（を）</sup>

判斷するものではない。私は日本文化をリスミカルなと

云つた。併し我々は真物の真実を行くことによつ

て、眞に創造的であり、眞に生きるのである。我々は我々の生

■■■■



の上から、  
 活の底から、  
 ならない。知情意の対立と区別して之を  
 過ぎない。それでは東洋文化の物の見方考へ方と於て、西洋  
 文化のそれ等と對して、独特な論理と云ふものがあるで  
 あらうか。今日歴史的に東洋文化の特殊性を研究して居る人  
 は別として、科學問題論的に東洋の文化の事物を論じて居  
 る人、西洋文化のそれによつて論じて居るのである。こ  
 れは、  
 なかろうか。然らざれば特殊を直ぐ一般として用ゐて居る  
 子過がない。轉我其直の原理を考へて居るに過ぎない。  
 論理は今日西洋文化の於ての物の見方考へ方の外には  
 論理的に  
 把握せなければ  
 能力心理学的な考へ  
 的考へる

四三三三



ないのだからか。それが唯一つのものであり、東洋文化に於ての物の見方考へ方は、<sup>その</sup>未発展の状態と考へべきであらう。此問題を決する事は、我々は歴史的世界に於て論理といふものの成立の根源、及びそれがその水に於て有つ役割を<sup>此問題を</sup>目から<sup>見</sup>溯つて、<sup>その根柢に於て</sup>その考へて居るの外にない。我々が物を考へると云ふことは、<sup>自己</sup>我々の歴史<sup>生命の</sup>的<sup>世界に於て</sup>的<sup>歴史</sup>的操作は<sup>自己</sup>形<sup>作用として</sup>我々の歴史的操作の外にない。偉大なる論理私は偉大なる論理の体系的発展として今日の西洋論理を認めると否なるものではない。而して我々は<sup>先ア</sup>其之を<sup>之を</sup>世界的な論理として<sup>之を</sup>学ばべき

西川



であらう。併し西洋論理と云へとも、それが歴史的生命的の自  
 己形成の形式として、歴史的生命的の特殊相を離れたもので  
 あらうか。~~神聖論理~~ <sup>形式的な抽象</sup> 形式論理と云ふ如きものは、何処でも同じもので  
 あらう。併し歴史的生命的の自己形成の形式として、~~具体的知~~  
 識の形式として、具体的論理は、歴史的生命的の特殊相と離  
 れたことはおきないであらう。西洋文化の行方が文化の唯  
 一の行方であらうか。私はすべて生命の發展と云ふものが  
 然る如く、文化はと云ふものも、~~唯一筋道~~ <sup>唯一筋道</sup> 唯一筋道ではなく、~~多~~  
 種々なる行方があるのであらうと思ふ。生物の進化發展と  
 云ふことも、我々人間へと云ふ如きもの外に、~~特色~~ <sup>特色</sup> 特色々あつた

日本文化

のかも知れない。否現にありのかも知れない。私はかゝる場  
 合、私の云はんとする所を明にすため、屢々リール学派の  
 藝術論を引用する<sup>のである。</sup>従来の西洋の藝術<sup>學者は專ら</sup>をギリシヤ藝術  
 を<sup>研究し、</sup>標<sup>準</sup>とす。所謂古典藝術を<sup>標準</sup>として藝術を論じた。ロ  
 ーマ晩期の藝術と云ふ如きものは無視せられた。併し  
 古典藝術が即藝術ではない。ローマ晩期の藝術の如きも、既  
 ち<sup>自身標準として</sup>論せられた。ヴオリンゲルはゴッテの藝  
 術について、その<sup>形成的形相の</sup>古典藝術のそれと異なる  
 ことを明にして居る。更にエジプト藝術と云ふ如きものは、  
 打<sup>ち</sup>破<sup>り</sup>の藝術とは相反する傾向のものとも考へられた。

ギリシヤ・ローマの

西田







25

いものがあると思ふ。少くも私は然思ふのである。我々は何  
 処までも論理的、徹底的、歴史的、世界の構造、歴史的、世界  
 の形成作用と云ふもの、還つて考へて見なければならな  
 い。敢て己を立つるに急して他を耳目を蔽ふ如きは、由来  
 我々の日本精神ではない。日本精神は何処までも正々堂々  
 や公明正大でなければならぬ。天地正大氣、粹然鍾洲秀、  
 は不二の嶽となり、登りては万葉の櫻となり、と云ふ。東洋に  
 於ては孔子以来、西洋に於てはプラトン以来、哲学は政治と  
 離れたいものではない。併し哲学が徒らに政策と道徳と  
 時、その水は曲学阿世たるを免れたい。イデーのない政治は眞

X 上真理を恐れぬものは、戦い臨んで敵又を恐れぬもの、  
 一面あり

西田用紙



の政治ではない。イデオロギイはイデーを含まなければならぬ。然るに、水は朝と相争ふと云ふ様子を云ふのである。

私は西洋論理と云ふものと東洋論理と云ふものと論理は二種あると云ふのではない。論理は一でなければならぬ。唯その水は歴史的世界の自己形成の形式として、その発展はつれて異なつた方向を有するに至るのである。大まかに云へば、西洋論理は物に主たる対象とした論理であり、東洋論理は心に主たる対象とした論理であるとも考へ得るのである。心を対象とした論理と云ふものはない。其論理はいつも客観的対象の論理でなければならぬと云ふでもあらう。併

し我々の自己と云ふものも歴史的世界の於ての事物であ  
 る。而してそのかぎり考へらるる辨せもの、論せらるるもの  
 である。而して物と云ふのも、実は歴史的世界の於ての事物  
 である。然るに、<sup>二外ならない。</sup>自然自己と云ふものを自然離れて、單なる物とい  
 ふものはない。すべてが歴史的<sup>事物</sup>の論理を含まれなければ  
 ならない。私は佛教論理は、我々の自己を對象とする論  
 理、心の論理といふ如き、<sup>崩芽</sup>唯實があると思ふのであるが、それ  
 は唯体験と云ふ如きもの以上の發展せなかつた。それは事  
 物の論理と云ふまでも發展せなかつた。私は先づ西洋論理  
 と考へ、云はれらるるものを徹底的に研究し、<sup>何処までも</sup>

すると共に、  
 四三三三三



×深く東洋的在物の見方考へ方を反省して、

批判的なる主要する所である。然るに水は今日の科術と

云ふ如きものを把握することには困難がある。今日東洋の研

究と云ふのは、研究の對象を東洋的<sup>（方面）</sup>に方向を向けて云ふのであつ

て、<sup>今日の世界は對してこれを動かし得る</sup>深く東洋的在物の見方考へ方を反省し、<sup>×新しい世界の在物の</sup>新らしい物

見方考へ方を把握し、歴史的世界の進展することと云ふので

はない。對象を新にすることは、見方考へ方を新にするこ

ではない。而も今日極めて容易に学問と日本的といふ

語が冠せられたるのではなからうか。学問は理論を有たねば

ならない。而してそれは軍と民族の民族性といふだけの

ものでなくして、世界的に働き得るものでなければなら

ない。数学や物理学の如きものも、ドイツ的とかイギリス  
 的とかフランス的とか云ふものがあるであらう。併しそれ  
 は数学や物理学が國民性<sup>國民性</sup>と違つて色々あると云ふこと  
 ではない。数学や物理学は一でなければならぬ。唯それ  
 種々の研究の仕方があつてである。精神科学と云ふ如きも  
 のは<sup>自</sup>自然科学とは趣を異にするものがあるであらう。併し  
 それも<sup>歴史的</sup>事物の学として、何処までも客観性を有つたもので  
 なければならぬ。感性情は直に学問ではない。思想の武器  
 も科学的でなければならぬ。